

南北朝正閏問題再考

千 葉 功

はじめに

南北朝正閏問題は、かつて「学問弾圧」として（大久保利謙）語られ、近年では史学史や歴史認識への興味関心の増大を背景に、日本の歴史学が原史料の収集や史料批判という「客観性」への「逃避」を決定づけたものとして（マーガレット・メーブル）、同時代の道徳論と相互規定的なものとして（廣木尚氏）、さらには「皇国史観」に貫かれた実証主義を研究主体において確立させる契機として（池田智文）の側面が指摘されています。

一方、南北朝正閏問題では、学術論文以外に良質な成果として、松本清張の『小説東京帝国大学』や長山靖生の著作がありますが、特に前者は清張独特の謀略史観的な「作為」が気にかかります。しかしながら、依然として清張の著作を無批判で引用しているものもあり、まずは正確な史実確定が必要であると考えます。

本講演は、種々の要因が複雑にからみあって形成されたものとし

て南北朝正閏問題をとらえるとともに、同問題を通して近代日本の特質をみていきたいと思います。

（一）南北朝正閏問題の発生と「第一の政治決着」

○喜田貞吉

喜田貞吉は、設置もない帝国大学文科国史科へ一八九三年に入學しました。喜田が南北朝時代史の授業を受けたのは星野恒からでした。喜田は、星野が修史館編修官以来の勤務で、豊富な資料をもって授業をしたことの驚きを回想します。就職口がないので大学院へ入ったところ、三高の先輩の推薦で突然文部省図書課へ就職することになりました。

その喜田を悩ませたのが、喜田が編修することとなった国定教科書における南北朝の取り扱い方でした。その際気を付けなければならないのは、国定期の前の検定期の教科書は、南朝を「正位」、北朝を「閏位」と位置づけるのが一般的だったということです。

しかし喜田には、明治天皇が北朝の系統であるということもあつてか、宮内省自体が南北朝正閏を決定できないなか、南北両朝の軽重をつけることは穏当でないと思われました。

結局、喜田は、宮内省による皇統譜発表があるまでは、両朝対立の事実のまま記して、軽重をつけない筆法としました。他方、教育上の必要から、楠木正成や足利尊氏といった臣下のみに局限して順逆を明らかにすることにしました。この論法は、歴史家と教育家という「二足の草鞋」の間で調和を求めた、「かなり苦しい説明」でした。

そして、喜田の見解を、同時代的に表明したのが、喜田の著作『国史之教育』です。喜田は歴史学Ⅱ「純正史学」、歴史教育Ⅱ「応用史学」と分けることを前提としたうえで、両者の折り合いをつけようとしています。いわく「北朝の尊氏は憎むべき者、之を輔けた将士亦同じく筆誅すべき者である。が、憎むべきは足利將軍までで、其の上に及んではならぬ」と喜田はいいます。

このような南北朝の取り扱いは喜田にとって苦しい選択でしたが、客観的にみれば、歴史学の見地から歴史教育の内容を一部改変し、かつその歴史観を国定教科書という国家権力によって強制するということを意味したのであります。

結局、一九〇三年からの第一期国定教科書では、歴代数が付されないまま南北両朝が併記され、光厳・光明天皇にも「天皇」の尊称が付されるようになります。この第一期はほとんど物議をかもしませんでした。第二期では新たに教師用教科書を作成することになり、その記述が南北朝正閏問題を引き起こすことになります。

○南北朝正閏問題の重大化の背景

次に、南北朝正閏問題が重大な政治問題となった背景を、三点挙げます。

第一に、桂太郎内閣による社会主義の取り締まりと、その結末としての大逆事件です。大逆事件は逆に桂内閣にはねかえって、決定的なダメージを負わせかねない事件でした。

第二に、野党立憲国民党の閉塞感が挙げられます。日露戦後、「桂園体制」という桂太郎と立憲政友会との提携体制が成立したことにより、憲政本党―立憲国民党は政治的疎外状況に置かれていました。この政治的閉塞感を打破すべく、国民党の犬養毅は南北朝正閏問題の政争化を決断するのであります。

第三は、貴族院における伯爵同志会の閉塞感です。当時、貴族院は多数を幸倶楽部と研究会とで押さえる「幸・研与党体制」のもとにあり、大木遠吉ら伯爵同志会はその体制から疎外されているという意味で、衆議院において政友会と桂内閣との妥協体制から疎外されていた国民党とパラレルな関係にありました。

○峯間信吉と豊岡半嶺

さて、一九一〇年一―二月の中等教員地理歴史科講習会で、講師の喜田に辛辣な質問をあげせたのが峯間信吉でした。

峯間は喜田の三歳下で、一九一一年時点で数え年三九歳でした。鹿島第一高等小学校在学中、^{潮来}の勤皇家宮本茶村の門下生に感化されます。東京高等師範学校国語漢文専修科を卒業しましたが、漢

文専攻であるところが注目されます。教師として様々な学校を転々とし、南北朝正閏問題当時は本郷区富士前小学校長でした。峯岡は、小学校教員の待遇改善運動と南北朝正閏問題とをリンクする形で進めますが、それは小学校教員が「国民知徳の基礎を作る」要職にある点で、両者が根底において不可分の関係にあったからです。その峯岡が持ち込んだ先が、『読売新聞』記者豊岡半嶺でした。

当時の『読売新聞』は文学・教育・美術・趣味・家庭中心の特殊新聞に傾斜、日露戦後報道第一主義に進んだ新聞界において二流三流と評価されていました。また、主筆の笹川潔が国家主義的な論説を掲げる一方、文芸欄では文壇の新思潮を代表する作家・詩人・評論家が登場するなど、紙面も統一性を欠いていました。

かたや豊岡ですが、喜田と同一年であり、師範学校・高等師範学校卒業後教諭として色々な学校を転々としたあと、南北朝正閏問題発生の前年に教育記者として『読売新聞』に入社していました。豊岡の歴史観は彼の遺著『大楠小楠』に表れています。彼は国定教科書が「北朝を正統としたる結果、一時、忠烈なる楠氏を以て、逆賊尊氏の輩と同視するに至」ったとみて、福沢諭吉の楠公権助論とともに危険視します。

豊岡の論説「南北朝対立問題（国定教科書の失態）」が掲載された一九一一年一月九日は大逆事件の判決が新聞に載った日として、『読売新聞』があえてぶつけてきたといえます。豊岡は「天に二日なきが若く、皇位は唯一神聖にして不可分也。設し兩朝の対立をしも許さば、国家の既に分裂したること、灼然火を睹るよりも明かに、天下の失態之より大なるは莫かる可し」と糾弾します。文中の「ニ

ヒリストさへ輩出する時代」の「ニヒリスト」とは、大逆事件関係者のような社会主義者を指しています。また、豊岡は「ハイカラ学者」の参加を排除するよう求めますが、この「ハイカラ学者」とは喜田を指しているのでしょうか。

ただし、他の新聞はこの頃「千里眼」を熱狂的に報道し、読売の戦略にはすぐには乗りませんでした。

○早稲田漢学グループへの飛び火

翌二〇日、早稲田大学講師室におけるストープを囲んでの談論から、牧野謙次郎と松平康国という漢学者たちが運動を開始します。牧野は若い時分に経学を学び、盟友の松平康国いわく、坊主と神主が嫌いだというだけに迷信のない、純粹の儒者でした。かたや、松平は幼い時分から漢学を習うとともに、ミシガン大学に留学して政治法律を学んだ人物でした。松平は、重野安繹が桜井駅の別れなどを抹殺したように「史家」が「古文書第一主義」をとる史学界の趨勢に強く反発しますが、これは南朝正統論者にひろくみられるところです。

そこに、牧野の求めで慶応義塾大学の漢学教師内田周平も加わります。内田は熊本の第五高等学校教授時代以来、崎門派という道学に移っていました。正義感の強い気難しい性格で、彼から見ても道はずれた言行があるただちに絶交したといえます。

今よりもはるかに官尊民卑が強いなか、早稲田ないし慶応関係者には、帝国大学への激しい対抗心が存在したと推測されます。また、「漢学」は歴史と倫理道徳が未分化で、倫理や道徳抜き歴史学へ

も反発がありました。つまり、牧野・松平・内田は、帝国大学という「官学アカデミズム」における歴史学に対して、二重の意味で強く反発したといえます。

○藤沢元造

牧野・松平は牧野の従弟で代議士の藤沢元造を引き込みます。元造は代々漢学者の家で、父の南岳の門弟が千百いるのをバックに代議士に当選しました。国民主義的対外硬派である又新会に所属、又新会が非政友会同時に分裂した際政党へ行かずに無所属となりました。もともと今日の選挙方法がよくないとの意識を抱き、「無識陋劣ろうれつの徒」と席を連ねるのをいさぎよしとしない態度が、のちの「奇矯」な行動の背景をなします。

藤沢は、同じ無所属、ないし又新会分裂後現在は国民党に所属している者の賛成をえて、衆議院に質問主意書を提出します。議会という「劇場」に問題が移ることで、メディアを始め注目が俄然集まることとなります。

桂内閣は対策を協議、父南岳を含む種々のルートから藤沢の説得を試み、小松原英太郎文相自身が説得にあたりますが、不調に終わります。その際、政府にとって最大のネックは、宮中自体が現天皇の祖先である北朝の天皇をも祀っていたという事実であり、南朝正統論に安易に同意するわけにもいかなかったのです。

一方、牧野に引き込まれた三塩熊太は運動に奔走します。その三塩の運動先は、衆議院は犬養毅ら国民党、貴族院は大木遠吉ら伯爵同志会でしたが、犬養・大木が積極的に呼応していくのは、前述の

とおりと党体制からの疎外による閉塞感から自然なことでした。

こうして、政治問題となるにつれ、メディアも南北朝正統論を報じるようになっていきます。まず文部省の失態として責任を問う声が高まり、さらには宮内省にも飛び火しかねない勢いでした。

『読売新聞』はさらに、喜田に対して悪意を持った人身攻撃的な報道キャンペーンを始めます。何の因縁か南朝忠臣の最終活動地である和歌山県から、今回多数の大逆事件逮捕者を出したと喜田が放言したと報じたように、大逆事件と結び付けられます。また、喜田の「傲岸」ぶりも強調されます。その結果、圧倒的多数の脅迫状と、ごく少数の同情書簡が、喜田のところに舞い込むこととなります。

さて、大逆事件と南北朝正統論争が連動して、大逆事件のような「逆徒」を生み出したのは教育において大義名分が徹底していないからだという論法が大きな力を持つにいたります。さらに、そもそも大逆事件の幸徳秋水なり森近運平なりが皇室へ悪意をもったきっかけとして、喜田らの歴史学が設定されるにいたったのです。

二月九日には文部省で喜田・三上参次と藤沢・牧野・松平との会谈が行われますが、まったくの平行線をたどります。そもそも藤沢は約束の時間を一時間以上遅れて、それも酒気ふんぶんとして現れます。当たり前といえば当たり前ですが、松平の手記と三上の談話ではおおきく食い違っています。藤沢・牧野・松平側の受け取り方は、喜田・三上は北朝正統論者とされます。藤沢一派からすれば、南朝正統論ではない南北朝対立論と北朝正統論は五十歩百歩だったのでしょうか。それに対して、喜田・三上の側の見方では、自分たちはそもそも北朝正統論ではなく南北朝対立論であり、かつその南北

朝対立論も南北朝対等論という意味ではなく、また容易に正閥軽重を論じるべきでないとは正閥軽重がないという意味ではなかったのです。このように、議論はまったくかみあっていません。

○藤沢の辞職

質問演説予定日前日の一五日、関西から上京した藤沢が新橋駅に到着した際、政府は藤沢をつかまえ、貴族院の大臣室で桂首相が藤沢と面会します。その席上、桂は教科書改訂を約束し、藤沢はそれを素直に信じたようです。桂が教科書改訂を約束したため、一転して藤沢は政府攻撃を思い止まらざるをえず、質問撤回を誓約します。

一六日、傍聴席は「大入木戸止の盛況」のなか、藤沢の演説が始まります。桂首相が責任をもって教科書改訂を約束した以上、私は「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ得タ」。桂首相はもはや至誠国を思う方であると感じたのであり、決して買収されたのも何でもない。国家に尽くすべきだけのことは尽くしたのだから、もはや議員としての職を辱める必要もなく、「此壇上ニ立派ナル戦死」＝議員辞職を行うといえます。その後、教育勅語の一節を引用しつつ長々と講釈のような演説となり、支離滅裂のためヤジが出たほどでした。

藤沢辞職可否の採決の際、突然、国民党の佐々木安五郎が、小松原文相の出席するまで採決を延期する動議を提出しますが、否決されます。佐々木は何としても小松原文相の責任問題から桂内閣弾劾へとつなげたく、動議を提出したのでしょう。

演説当時の藤沢が酒気を帯びていたのは確実で、その奇矯な行動はメディアの格好のネタでした。たとえば、『読売新聞』は、期待

が裏切られたことへの反動からか、詳細に報じています。藤沢は桂との会談後、首相用の人力車で牛込神楽坂の料理店すゑよしに乗り込み、芸妓などにも寿司・バナナ・オレンジなど食べたいものは何でもとってやり、払いも気前がよく、藤沢の外套の隠しには十円紙幣がどっさり入っていた。すゑよしを出た藤沢は芸妓を連れて待合もみちに入ったが、その芸妓にも金一〇〇〇円と、二〇〇円の貯金通帳を与えたと報じます。藤沢が政府によって買収されたことを強くにおわす記事であります。

このように、藤沢の質問が桂内閣弾劾につながることを期待したメディアは、藤沢の行動に失望するとともに、それを強い政府の「圧迫」を非難しました。

○水戸学関係者、ならびに大日本国体擁護団

三塩が水戸教育会長の菊池謙二郎にも連絡を取ったことから、南朝正統の立場から政府を弾劾する運動は地方へも波及します。

菊池は早くから水戸学の影響を受け、ことに藤田東湖に傾倒しました。一八九〇年、新設の帝国大学文科大学国史科にはいったことから、喜田の四歳年長の先輩にあたります。しかし、卒業後の歩みは対照的で、菊池は教育畑へ向かいます。

もともと水戸は水戸学の関係で、南北朝正閥問題や「国民教育」の問題に敏感に反応する土地柄でした。菊池が会長をつとめる水戸市教育会も、二月一八日、教師用国定教科書から「国民教育上不穩当」と思考される個所の削除を求める建議書を小松原文相へ提出することを決定しました。建議書に添付の理由書では、南北朝正閥に

関する既に一定した「国民の倫理思想」を、一片の命令をもって変改しようとするこの不当性を挙げていました。

かたや、藤沢の弾劾質問が不発に終わったことを受けて、内田周平らは作戦を練り直さなければなりません。内田は郷里の浜松にいる兄の正を呼びよせるとともに、三塩とともに「大日本国体擁護団」を結成しました。この時点で、牧野と松平は事実上手を引きまです。これ以上政治問題となり、政党に利用されることを嫌ったからでしょう。かたや、内田らが作成した大日本国体擁護団の設立趣意書は、すみやかに大義名分を明らかにし、文部省編纂の「小学日本歴史」を廃棄させ、人心の帰趨を定めることを求めています。彼らからすると、事功を収めるのに汲々とする学者は好んで異端を吐いて己の博識をひけらかす学者は「抹殺歴史家」という等式が成り立ち、「其魁」が喜田でありました。大日本国体擁護団は檄文の配布や講演会の開催など、活発に活動しました。

○衆議院―政府問責決議案へ

内田は大日本国体擁護団の結成とともに、国民党の犬養との連携を深めていきます。犬養の方も南北朝正統問題の政争化を決断しますが、それは単なる政略からであるのみならず、思想的にも国定教科書の記述は失態であると本心から思っていたでしょう。犬養は、五代前の祖幸左衛門以来、崎門派の学統を承けていることを誇りに思っており、家学の復興を念としていた人物でありました。

また、国民党内部でも、純民党路線を主張していた犬養派（すなわち福本日南・佐々木安五郎・蔵原惟郭・村松恒一郎）は、南北朝

正統問題の政争化に積極的でした。結局、国民党は、大逆事件と教科書問題を連結させた政府問責決議案の提出にふみきります。

このように、事件は教科書問題から一転して政治問題化し、政府の責任を問うところまでに進展したのです。

ちなみに、桂内閣との妥協体制を担っていた政友会の大多数、特に幹部は、原敬のように文部省が教師用教科書を南朝正統から南北朝並立に「改めた」のはたしかに「穩当の事にはあらず」と思いつつも、桂内閣と情意投合している以上、弾劾案には無論同意するわけにはいかず、討論せず即否決するのを上策と考えていました。ただし、政友会の陣笠代議士には水戸出身者を中心に国民党の決議案に同調する意見も強く、小松原文相の辞職と教科書改訂という桂の「ほのめかし」を利用して幹部が反対を抑え込みます。

さて、二月二三日当日は秘密会になるという風評にもかかわらず、傍聴席は開議前に早くもいっぱい、議席も議長着席前にいっぱいでした。傍聴人の退室後、秘密会が始まります。

冒頭、決議案の説明として、犬養が激烈な弾劾演説を行います。

犬養は、前日来風邪で病床にあったのを押しでの登壇でした。犬養の弾劾演説は、前半の大逆事件に関しては政府による社会主義者への過酷な取り締まりを非難し、後半の教科書事件に関しては文部省による南朝正統論の変更を非難したものでした。一見すると前半と後半とで論理が一致しないようにも見えますが、政府の責任をすどく問うという一点でつながっているのです。

それに対する桂の答弁は、もしも小学校教科書の字句で教育上まどいを生じる恐れがあると認めるものがあれば、政府は相当の処置

をすることを言明したもので、従来貴族院等で行った答弁のラインを堅持したものでした。政友会の元田肇による討論終結の緊急動議が国民党代議士の猛烈なヤジを呼ぶなか採決が行われて、賛成九三、反対二〇一で、否決に終わりました。

ちなみに、決議案否決後もたとえば政教社の演説会が開かれるなど、政府批判の声はすぐにはやみませんでした。

○激昂する山県

さて、松本清張は元老の山県を南北朝正閏問題の影の黒幕であるかのように描いていますが、実際は首相の桂から何の報告もない状態に置かれていました。その山県に情報をもたらさし、山県をして激昂・興奮のあまり痙攣せしめた人物が井上通泰です。

井上は柳田国男の実兄で、眼科医のかたわら歌人でもありました。歌好きの山県の歓心を得、さらに若いときに「新声社」という文芸グループを結んでいた森鷗外・賀古鶴所が東京へ帰ってきたことから、山県を巻き込む形で歌会「常盤会」を組織していました。

井上は、南北朝正閏問題が起きたとき夜もろくろく眠れませんでした。井上は、それは「元来学者は国家の為に学問すべき筈なのに、ともすれば学問の為に学問」していることに危機感を抱いたからです。井上は賀古や市村瓊次郎と連れ立って、小田原古稀庵の山県を訪問します。井上らが山県に、忌憚なく南朝正統論に関する「内情の経過」を詳述すると、山県は非常に驚いて「桂は何をして居る」と激昂・興奮のあまり全身に痙攣を起こしたといえます。

山県の意識では、完全なる国民教育の普及や穩健思想の涵養のう

えで重要なウエイトを占めていた小学校教育において、国定教科書が南北朝並立説で書かれていることを「発見」したことは、驚愕でありました。山県からすれば、後醍醐天皇のように正式の儀式を踏んで踐祚をした方が正統なのであって、血脈流派を論じるべきではない。「正当の儀式に拠つて位に上られた天子を、真正の天子として之を奉ずるが後世乱階の生ぜざる所以」と山県はいうのです。

山県は、「大義親を滅す」とまで極言した詰問状を桂宛てに送ります。山県は南北朝正閏問題を思うと夜も眠れず、食べても味がしないほどでした。

山県は寺内正毅宛ての書翰で、「全躰文部省中之腐儒者（歴史博士）ハ歴史ヲ解説セスシテ歴史ニ解説セラレタル一種之謬見ヨリ如此僻説ヲ起シタルモノト見テ可然候。苟シクモ天ニ二日ナク地ニ二王ナシトノ常徑ヲ没却シ、将来我帝国ヲシテ暗国（愚世）セ界タラシムルハ、明知看火矣」と、教科書改訂を断行しない桂内閣の「緩慢」の処置を激しく非難、「二刀両断之御所分」を求めます。

それへの桂の返信では「過日来教科書問題突然相起り、最初之程は文部当局と議員間位之問答に留り居候ものと相見へ、……追々火の手を挙げ、頃日之一大事件と相成初めて事の容易ならざるを研究発見仕候」と弁解していますが、即物的な思考を有していた桂にはイデオロギーの重要性がつかめていないところがあって、山県への弁解も本心であったと思われず。

結局、二月二五日の文部省省議で、教師用教科書で「容易に其の間に正閏軽重を論ずべきに非ざるなり」と記載したものは廃棄し、児童用教科書中、尊氏が「錦旗を押立て」とあるは賊の名を避ける

たけになした姦狎を証明する語として教授するよう注意することを決定、翌二六日、各府県知事に発送します。さらに、桂は二七日の閣議で南朝正統を決定するとともに、文部編修の喜田貞吉を休職処分とする稟議を認可しました。

これらの措置をしても不十分と考える大日本国体擁護団は運動を継続、喜田を上回る「元兇」として三上を攻撃しましたが、三上が教科用図書調査委員を三月一日付けで罷免されると、事実上の運動目標を失い、「正論」勝利の記念と団体解散の宴会を開催、交遊倶楽部ないし社交団である「友声会」に切り換えました。

さて、南朝正統を閣議決定したうえで、桂は二八日に参内、明治天皇に歴代に関する上奏を行いました。諮詢された枢密院も南朝正統を全会一致で決定、明治天皇も採納して、皇統は南朝の諸天皇であることを認定しました。

ただし、北朝の子孫である明治天皇からすれば、内心忸怩たる思いがたでしょう。明治天皇は「光厳・光明・崇光・後光厳・後円融の各天皇に対しては、崇高の思召により尊号・御陵・御祭典等総て従来の儘たるべき旨を命じ」ました。すなわち、彼が嫌う近代化政策に関して、オフィシャルな場では藩閥政府の要求に屈して近代化に従いつつも、「奥」、すなわちプライベートな場では近代的なものを頑強に持ち込ませないという、いつもの行動パターンをこのときも踏襲したのだと推測されます。

こうして、一時は衆議院における内閣弾劾決議案の提出によって苦境に陥った桂内閣も、「第一の政治決着」によって、政治危機を乗り切ります。桂にとってこの政治危機がいかに深刻なものであつ

たかは、後年に桂が人に「予は予の生涯に於て、当時の如く痛心したる事無かりき」と語ったことから窺われます。

三月一四日には文部省は訓令第一号を発して、「南北朝」の項を「吉野朝」と改名するよう命じました。

(二) 南北朝正閥論争の構造

今まで「第一の政治決着」が行われる過程をみてきましたが、実はこのあと、「第二の政治決着」があります。それをみる前に、二つの政治決着の間、具体的に一九一一年二～三月を中心に、新聞・雑誌等のメディアで論じられた議論をみることで、南北朝正閥問題をめぐる思想配置ないし思想分布のありさまを見ていきたいと思います。南北朝正閥問題はメディアで大々的に議論されたものであり、山県などはそのこと自体を苦々しく思っているわけですが、このようなメディアで現皇室につながる祖先の正統／非正統が論じられることに近代日本の特徴が表れているのです。

以下、「北朝正統説」・「南北朝並立説」・「南朝正統説」の三つに区分したうえで、見ていきます。その際、著者の年齢が若くなるにつれて、南朝正統説は弱まるという仮説を立ててみました。以下、御手元の年齢一覧を御覧になりながら、御聞きいただきたいと思えます。

まず、北朝正統説です。南北朝正閥問題ではごく少数ながら明確な北朝正統説が存在し、少数ながらも声高に主張しているところが興味深いです。

○浮田和民（五三歳）

「元来我輩は国定教科書の制度に反対する者である」との立場をとる浮田は、南北朝正閏問題を、事実問題・法理問題・道徳問題を総合した「教育問題」としてみたうえで、いずれの点からみても北朝が正統だといえます。このように、浮田は皇室の正閏を判断するにあたって、「天下の民心順服」という条件をとっても重視するところが特徴的です。また、武家政治を擁護していますが、明治維新が王政の回復であったことを考えると、明治維新を否定しかねない論法でした。南朝正統論者から浮田への攻撃が特に激しかったのもよくわかります。

また、浮田は尊氏を井伊直弼同様に「逆賊」から救おうという非常に勇気の要る行為をしたように、浮田自身が「自由討究の精神」を実践しようとしていたことが窺われます。

○吉田東伍（四八歳）

吉田は、北朝を正統としていた明治維新以前の「旧法」を維持するのがよく、また事実二人の天皇が併存し、かつ常識から考えても北朝の系統が栄え、南朝の系統は衰滅に帰したのだから、北朝が正統であるといえます。特に吉田が、正統の皇位は「国家の威力」の存するところであらなければならないと主張しているところが興味深いです。

次に、南北朝並立説です。

○久米邦武（七三歳）

久米は、中国の「大義名分」を間違えて理解したうえで、国体のまったく違う日本にあてはめることを批判します。また、三種の神器のある方が正統だというのは「子供論」であり、臣下の忠・不忠で天皇の正統・不正統を語るのには不敬至極だといえます。

久米は談話で、南北朝を会社にとえると社長が二人出来たようなものだが、大切な「根柢」だけは京都にちゃんとしていた。遺憾ながら当時の日本には天に二日あったが、国家は平時と少しも変わりはないといえます。このようなざっくりぼんちとした口調は、反対派の神経を逆なでしたことでしょ。

のち久米は姉崎正治と論争しますが、名教を持ち出す姉崎を批判して、歴史事実には児童の前で口にするのが忍びないことも多いが、そのようなものはことごとく捨てればよいのだと言い切ります。

久米事件後の久米は言論を抑制したという先行研究の指摘がありますが、そうではなかったことがわかります。

次に、南朝正統説ですが、これを唱える者は非常に多いです。

六〇歳以上の藩閥政治家ないし明治政府の官僚として活動してきた者たちは、維新当初既に南朝正統で定まり、南朝正統はわかりきったことで、いままら疑問の余地はない、という態度を取ることがほとんどです。

六〇歳以下になると、南朝を正統とするにせよ、近代の高等教育をくぐったせいも、色々と理由づけをします。中にはたとえ歴史教育であっても虚偽があってはならないといった、南北朝並立説が

いの主張があったりもします。よって、個々にみていきたいのですが、非常に多くの人物を羅列するわけにはいきませんので、主要な論者に限定したいと思います。

○井上哲次郎（五七歳）

南北朝正閏問題において、というより南北朝正閏問題においても、活発な言論活動をしたのが井上哲次郎です。

井上らしく「国民道徳」の観点から、南朝正統説を採用します。

井上は「国民道徳」の立場から判断すると、万世一系の皇統こそ日本の国体の基礎であり、過去・現在・未来を一貫して永久不変であるべき性質のものである。よって、国民教育において、この国体の第一義諦（「フォルスト、プリンシプル」）を了解させることが必要であるといえます。

ちなみに、井上は皇統の正否を断じるには六条件について考えなければならぬといいますが、そのうち三種の神器という条件は他の条件よりもあっさりしています。後年井上が神器は模造であると述べて、不敬であると攻撃され、著作を絶版にせざるをえない状況に追い込まれますが、それを予見させる内容であります。

○菊池謙二郎（四五歳）

菊池は水戸学の立場から南朝正統説のため激烈な運動をしたことは前述のとおりですが、一方で国定教科書の編纂委員が壬申の乱など「皇室の御争に関することは成るべく触れない主意」で書いているのは「小心翼翼たる誠意」にすぎず、「歴史も有のまゝに書いた

方が皇室の尊厳をます／＼發揮することになる」ともいいます。大義名分論者で水戸学者の菊池が歴史をありのまま書くことを勧めるのはきわめて興味深いところ です。

○姉崎正治（三九歳）

喜田の帝国大学のときの同級生である姉崎は、教育が歴史にもとづくとなればその歴史は虚偽であってはならないといいますが、歴史を将来の徳育に応用する場合、研究者の「解釈」に加えて「道徳的判断」も必要であり、皇室の尊厳が国民精神の中心として放つ光明に曇りがかかったとき名教問題は生じるとして、「名教」を重視します。宗教学者として倫理を重視する姉崎らしい主張です。

ちなみに、姉崎は新聞論説中、史料の一面によって史実のみを探究し、それに道徳的判断を加えないような歴史研究者を「史料先生」「史料論者」と揶揄していますが、これらが主に久米邦武を指しているのは明白でしょう。

○黒板勝美（三八歳）

当時黒板は史料編纂官兼東京帝国大学文科助教授として三上参次の下にいながら、三上とは反対の立場に立ったわけで、両者は微妙な緊張関係にあったと推測されます。

ただし、黒板は南朝正統説とはいえ、かなり限定的・暫定的な意味で主張しています。すなわち、歴史家の見地からは南北朝時代を判断する材料が少ないので時期尚早論を唱えて暫定的に旧来の説に従い、また今まで明らかにされた史実に道徳的判断を加えたならば

南朝を正統とする方が穏当だといえます。

また、黒板は、教育＝歴史の応用として歴史学とは区別しつつも、事実を曲げることは絶対に不可だといえます。よって、南北朝時代における皇位継承の事実の分析は、意外にもバランスよく行われているように思えます。さらに、南朝を正統とする立論の一番の根拠は、後醍醐天皇が皇位の継承について「絶対的主権」を保有し続けたという点にあります。そのような「新しい」論法を援用するところが興味深いです。

以上たいへん簡単にみてきましたが、前述の仮説が正しいかどうか、「おわりに」で考えてみたいと思います。

(三) 教科用図書調査委員会と「第二の政治決着」

○教科用図書調査委員会

さて、「第一の政治決着」後も依然として問題は残っていました。すなわち、実際に教科書をどのように改訂するかは未決の問題でした。以後、「論争」の場合は、教科用図書調査委員会へ移ることになります。

教科用図書調査委員会第二部会（歴史部会）では、罷免された喜田・三上の後任として広島高等師範学校教授から新文部編修となった重田定一と、東京高等師範学校教授の三宅米吉が任じられました。これは、東京帝国大学系の歴史学者を更迭して、高等師範学校の歴史教育関係者をもって補充したことを意味します。

重田は、三高から東京帝大の国史科というルートにおいて喜田の一年後輩にあたりますが、大学卒業後は高等師範学校教授の方向へ進みます。かたや、三宅は、若き日に『日本史学提要』で、神話を排した科学的な日本史を描こうとしたことで有名な人物ですが、南北朝正閏問題のころには往年の啓蒙的姿勢は後退していたと思われます。

「第一の政治決着」によって、南朝正統説の枠内で教科書を改訂することが決定されていました。また、人事面でも、喜田・三上ら南北朝並立論者が排除され、委員はほぼ南朝正統説者で占められました。しかしながら、たとえ南朝正統説の枠内だとしても、具体的に教科書の記述をどのようなものにするかでは意見にかなりの隔たりがあり、実際、五、六月にかけて行われた第二部会でも、七月に開かれた総会でも、激論となりました。

その対立の構図は、「両朝に関する史実を其儘に記載すべしとの史実論と、北朝を抹殺して北朝天子を親王とすべしとの憲法論」との対立です。

後者の「憲法論」とは、穂積八束が主張したものです。穂積は「西洋史の諸例を引き主権不可分論を述べ天に二日無く皇位ふたつある可からずと論断」し、「憲法に当嵌あてはまるやう過去の史実を取扱ふに何の不可あらん」というものでした。具体的には、「光厳天皇」「光明天皇」は「光厳院」「光明院」と改め、「南朝」「北朝」という呼称は一切やめ、北朝に関する史実はすべて削除すべきという極端な主張でした。

よって、委員長である加藤弘之や山川健次郎も、前者の史実論に

同調しました。たとえば、山川は「南朝を正統とする為に北朝の史実を抹殺する必要がどこにあらう、史実は史実なり、抹殺し得べきものにあらず」といいます。具体的には、北朝の「光厳天皇」「光明天皇」は「天皇」の呼称を残し、「北朝」という表記も叙述上使わざるをえない箇所は残すべきという主張でした。

すなわち、穂積の議論は、同じ南朝正統論者から見ても極端なもののように思われたのです。内田周平ですら、穂積の議論を「正論」としつつも、「然しながら同じく皇統を承けられた事でありますから、それは吾々として道徳的に忍びられぬのであります。矢張り閏位として添へられておく方が穩当と思ひます」と述べています。南朝正統説を呼号していた『読売新聞』や『萬朝報』といったメディアも同様のスタンスでした。

総会では論戦の声が会場外にもれるほどの激論を経て、採決の結果、穂積ら「憲法派」の極端な「北朝抹殺論」は少数で敗れ去ります。

○「第二の政治決着」

しかしながら、小松原文相・桂内閣は、内閣総辞職して政権を政友会総裁の西園寺公望に明け渡す直前というどさくさに紛れて、それも教科用図書調査委員会の総会決議を無視して文言を修正する「第一の政治決着」を行いました。

すなわち、「光厳天皇」「光明天皇」を「光厳院」「光明院」と改め、「北朝」を形容するものとして「尊氏の擅はしに京都に立てたる」を挿入し、北朝の天皇を歴代表から削り、略系図では光厳・光明の

両天皇を「親王」として、崇光・後光厳・後円融の三天皇を「王」として記載することになりました。つまり、さすがに穂積の主張するような北朝に関する史実全ての削除はなかったにしても、総会決議から穂積派の主張に近づけて、北朝の諸天皇を「天皇」とは扱わない措置に至ったのです。

これは、後年三上が嘆じたごとく「大変に行過ぎたことであ」って、喜田がしつこく指摘するように、つじつまのあわないところがでてくるような措置だったのです。

おわりに

以上、延々と南北朝正統問題の経過をみてきましたが、それではわたしたちはこの問題をどのように考えるべきでしょうか。たんなる国家による学問弾圧ですませてよいのでしょうか。むしろ、そのような側面も確かにあります。しかし、実際は複合的な要因が複雑にからみあって展開したのでありまして、話はそう単純ではないのです。

まず、前提としておさえておくべきことは、歴史学以外の学者、特に漢学者や歴史教育関係者における南朝正統説の根強さであります。当初、年齢がさがるにつれて南朝正統説の度合いは低下するとの仮説にもとづいて、参考資料のような登場人物の年齢一覧を作成してみました。喜田を強く批判した峯間にしても豊岡にしても姉崎にしても喜田より年少でありまして、仮説はあてはまりません。おそらく、明治期においては長らく学校制度を補完するものとして漢学塾が存在しており、公式の学校のほかに漢学塾に通った者も多

かったのです。そして漢学塾に通うことによって、漢籍から名分論的な歴史観を学ぶ機会は予想以上に多かつたのではないのでしょうか。

そのような歴史学以外の学者ないし一般に根強い南朝正統説を、喜田は歴史学の成果にもとづいて改変しようとはしますが、それは国定教科書を通じてでありまして、客観的には国家による歴史観の強制を意味するものと思います。すなわち、南北朝正閏問題は、国家を背負って歴史編纂を担っていた歴史家が民間の神道家・国学関係者からその歴史観に攻撃を受けた久米事件とパラレルな関係にあるといえるでしょう。

南北朝正閏問題では、教科書攻撃の口火を切ったのが民間の漢学を専修した教育関係者であることが興味深いです。すなわち、通常イメージされるように南北朝正閏問題によって歴史学と歴史教育とが分離したのではなく、もともと歴史学⇨南北朝並立、歴史教育⇨南朝正統と分離しているなかで、国家権力によって後者を前者に強引に一致させようとして反発を受け失敗したといった方が実情に近いかと思います。

その反発を商業的に利用したのがマスコミでありました。経営的に苦しい『読売新聞』は南北朝正閏問題を意図的に大逆事件へとむすびつけます。そして、当初は千里眼事件があるためもありあがりませんでした。最終的に帝国議會に舞台が移ることでメディアは俄然活性化します。色々な論者が新聞・雑誌に持論を展開しますが、南北朝のどちらが正統であるか、政府自身の立場が定まっていないためでしょうか発売禁止などは行われず、おおっぴらに議論が展開します。つまり、意外にも、マスコミによって皇室の正統性をめぐ

る「議論」——ただし圧倒的な南朝正統説によって、それ以外の論がきき消されがちではありますが——が大々的に行われたのです。

その新聞に載った教科書攻撃の記事に真っ先に反応したのが、早稲田ないし慶応の漢学者たちでした。今よりもはるかに官尊民卑が強いなか、私立大学には帝国大学など官立学校に対して、激しい対抗心が存在したと推測されます。また、牧野・松平が帰属意識を抱いていた「漢学」という学問分野は、歴史と倫理道徳が未分化なものでした。よって、牧野や松平は、帝国大学という「官学アカデミズム」における歴史学に対して、二重の意味で強く反発したのだといえます。

牧野らが運動した先は、衆議院では犬養ら国民党、貴族院では大木ら伯爵同志会でした。国民党も伯爵同志会も、衆議院・貴族院それぞれにおける与党体制から疎外された政治グループでして、政治的に閉塞な状況を打破するために利用したのが歴史問題でした。特に犬養は、大逆事件と連動させる形で内閣問責決議案の提出にふみきります。これに対して、桂首相は妥協関係にある政友会の協力で切り抜けたのです。

ただし、桂は政治的多忙のため元老の山県には事後報告ですませ、また桂内閣の対策が後手後手にまわっていることから、山県の叱責を買います。桂は、桂内閣をゆるがしかねない歴史問題を処理するため、議會答弁等で教科書の改訂を約束する一方で、南朝正統の裁可、喜田の休職処分を進めます。これが「第一の政治決着」にあたります。

しかし、問題はそれで終わりませんでした。場を教科用図書調査

委員会に変え、また委員を南朝正統論者だけで固めたとしても、実際の教科書叙述をいかにするのかわかぬ意見に隔たりがありました。中には、穂積のように憲法にあわせて歴史を裁断し、北朝を抹殺すべきだと主張する者もいる一方で、加藤委員長をはじめとする大多数は、史実を史実として認めたとしても南朝正統はゆるがないという意見でした。結局、後者の線で決議が行われたにもかかわらず、小松原文相・桂内閣はその決議をくつがえして、穂積の主張に近づけた内容に修正してしまいます。これが「第二の政治決着」です。

二度にわたる政治決着は、たしかに最終的には国家の介入による学問弾圧という性格をおびています。ただし、歴史観に介入した国家が悪かったと簡単にすませるわけにはいかない複雑でナイーブな問題をかかえていると思われれます。南北朝正統問題が現代の日本にもまったく通じる話ではないかという想いが、単なる杞憂であることを切に願って講演を終わらせたいと思います。